

“来不及”句型と“不及来”句型

—“来不及”型可能補語句型の起源に関する一要素—

伊原大策

1 はじめに

現代漢語において常用される“来不及”は、形態的にも機能的にも可能補語構造であると認定できるため、その所謂原型として結果補語構造“来及”の存在が想定される。しかし、現代漢語において“来及”の使用例を確認できないのと同様に、かつて“来及”が使用された痕跡を歴史的に見いだすことは難しい。ところが、機能のみに基づいて語法史を遡れば、機能が同一で形態の一部に類似性を持つ“不及来”句型の存在を知ることができる⁽¹⁾。

小論は、時間型可能表現の原初の形態として、かつて“不及V”句型が多用された事実を指摘し、それを“V不及”型可能補語句型の所謂原型と認めることにより、複雑な“来及／来不及”成立史の一端を担った複数の要素のうちの一つを明らかにしようと試みる⁽²⁾。

2.1 上古漢語における“及”の機能

“及”の用法はもとより多様であるが、上古漢語における動詞としての“及”の用法には、それ自身が持つ特性に基づき、句型に応じて機能に偏りが生じている。

1、及，逮也。《説文》（“及”は「およぶ」である）

“及”は「およぶ」を原義として用いられる。そのため、この語が賓語を伴う時、「およぶ」という動作の対象が賓語として選ばれる。

2、先王之制禮也，過之者，俯而就之，不至焉者，跂而及之。《礼記》〈檀弓上〉（先王が送葬の礼を制するにおいては、高すぎる者は低くして合わせ、それに達しない者は爪立たせて〔その高さに〕及ぶようにした⁽³⁾）

3、爲説者曰孫卿不及孔子，是不然。《荀子》〈堯問〉（説をなす者が、荀子は孔子に及ばないと言うが、そうではない）

例文2の“及”は高さについて述べ、例文3の“及”は程度について言っている。このように、“及”は「空間的に動作が対象におよぶ」ことを示す場合も

あるし、「抽象的に程度が対象におよぶ」ことを表す場合もある。

また、鄭玄は“及”について「いたる」という説明をつけている。

4、及、至也。《儀礼》〈燕礼〉鄭玄注（“及”は「いたる」である）

“及”が「いたる」という意味で用いられるからには、その賓語として場所詞も選ばれる。

5、三揖，每門止一相，及廟，唯君相入。《周礼》〈秋官司寇下〉（三度揖し、それぞれの門ごとに相を配置し、廟に至るとただ主君の相だけが中に入る）

6、遂賓姜氏于城穎，而誓之曰不及黃泉，無相見也。《春秋左氏伝》隱公元年（そこで姜氏を城穎に閉じこめてから、黄泉へ至らなければ母に会うことはないと言った）

7、微楚之惠，不及此。退三舍辟之，所以報也。《春秋左氏伝》僖公二十八年（楚の恩恵がなければ〔私は晋の君主という〕現在の境遇に至っていなかったであろう。三舍の距離を退いて楚軍を避けるのは、恩義に報いるがためである）

例文5と6の“及”では具体的な場所が示されているが、例文7の“及”で表されているのは、話者の現在の地位または状況である。

こうした例の他に、時間詞も好んで賓語に採用される。

8、及冬，則以火爨鼎水而沸之，而沃之。《周礼》〈夏官司馬〉（冬になると、火で鼎の水を沸かして沸騰させ、それを〔壺の中に〕注ぐ）

9、及大昕之朝，君皮弁素積，卜三宮之夫人世婦之吉者，使入蠶于蠶室。《礼記》〈祭義〉（三月朔日の朝になると、君主は皮弁服の白の縁取りのあるものを身に着け、三宮の婦人や女官を占って吉となったものを蚕室に入れ、そこで蚕を飼わせる）

10、先時者殺無赦，不及時者殺無赦。《書経》〈胤征〉（〔曆象が天時に〕先だった場合は死刑に処して許すことがなく、それに遅れて間にあわない場合も死刑に処して許すことがない）

これらの例では、いずれも時間意識に基づいて動作が対象におよぶことが表されている。

以上のように、“及”が名詞性賓語を伴った時、空間、程度、地位・状況、時間などが示される。しかし、これらのうち、程度や地位・状況とは空間的に捉えることのできる概念を抽象的に見立てたものに他ならないので、これを空間的到達の一種として扱うことができよう。したがって、以上に認められる

“及”の機能に整理を加えると、“及+N”の機能は、「空間型」と「時間型」の二つに分類することができる。

さて、“及”が賓語として従えるのは名詞だけではない。この語は動詞句をも賓語として伴うことができる。例えば次の如くである。

11、及將幣，旅擯三辭，拜逆，客辟。《《周礼》〈秋官司寇下 司儀〉》（幣の儀式を行う時になると、案内役を並べて三度辞謝し、迎拜すると客はそれを避けて受けない）

12、君於大夫，將葬，弔於宮。及出，命引之，三步則止。《《礼記》〈檀弓下〉》（君主は大夫の葬儀の時、送葬を行おうとして遺体安置所で弔問する。出棺する時になると人々に命じて棺を引かせて三步ごとに止まる）

このように“及”が動詞句を賓語として従えた時、しばしば時間的到達が示され、空間的到達を示す用例は容易に見いだせない。これは“及”の文法機能に変化が生じたためではなく、そこに伴われる賓語の性質に偏りが生じたためであろう。すなわち、“及”の賓語として動詞句によって示される対象が動作そのものであるため、行為が実行される際に付随して生じる時間概念が賓語との間に発生し、その結果、時間的到達の表現に偏りがちになることによるものと考えられる。したがって、“及+V”の機能は「時間型」に偏ると言える。

以上は動詞“及”が単独で用いられた用法であるが、この語は他の動詞と連用され、“V+及”という動詞連語を構成することもある。この時、“及”が原義として「および」「いたる」という意味を持つだけに、連語を構成するもう一方の要素（V）として移動動詞が好まれる。

13、射人納賓，賓入及庭，公降一等揖之。《《儀礼》〈燕礼〉》（射人が客を迎える時、客が邸の庭にまで入ると、主人は階段を一段下りて客に挨拶する）

14、弟子厭觀之，走及匠石曰。《《莊子》〈人間世〉》（弟子は〔立派な木を〕つくづく眺めてから、大工の棟梁のところまで走って行って言った）さらに“V及”は移動動詞以外をも連語構造の中に取り込む結果、具体的な空間認識を越えて、抽象的な到達を示す場合にも用いられる。

15、君貺寡君，延及二三老，拜。《《儀礼》〈聘礼〉》（君主が我が君を慰勞し、続けて二・三人の大夫にまで慰勞すると、それに拝謝する）

16、賓牟賈侍坐於孔子，孔子與之言及樂。《《礼記》〈樂記〉》（賓牟賈が孔子のそばに侍っていると、孔子は彼と音楽のことにまで言い及んだ）

こうした用法は、空間認識が具体的なものから抽象的なものへと拡大された

ものにすぎないから、空間的到達を示す用法から離れたものではない。つまり、これは「空間型」機能に基づく用法であると言える。

動詞連語“V+及”の用法を観察すると、空間的到達を示す用法が目につき、時間的到達を表す用法は容易に見いだせない。これは、動詞連語が構成されることによって“及”の文法機能にわずかな変質が生じ、こうした動詞連語が、動作の実現を表す補語用法に向かって拡大された結果⁽⁴⁾、時間的到達を示す意味を持つ機能が排除されがちになったためであろうと考えられる。したがって、“V+及”は、「時間型」機能を避け、「空間型」機能に偏ると言える。

以上に基づき、動詞“及”が持つ機能について、句型ごとに整理を加えると、各句型は以下に示す用法に顕著に偏るという特性を有する。

“及+N” … “及”が名詞性賓語を伴うと、「空間型」機能と「時間型」機能を持つ。

“及+V” … “及”が動詞性賓語を伴うと、「時間型」機能に偏る。

“V+及” … “及”が動詞連語を構成すると、「空間型」機能に偏る。

現代漢語の“来不及”（「間にあわない」と訳される）は機能について見ると「時間型」であり、形態について見ると“V不及”という姿を持つ。そのため、“来不及”の成立史を検討するためには、上のうち、機能と形態の点でそれらの要素と関係するものに注目すればよい。すなわち“及+V”と“V+及”である。これはとりもなおさず、“及”が動詞と関わった際に「時間型」機能を発展させる過程を観察することでもある。

2.2 否定形“不及V”の機能

《説文》や鄭玄注が述べるように、“及”は「およぶ」であり「いたる」であるから、“及”が動詞句を従えて“及V”という句型を構成した時、「～する時におよぶ/いたる」を意味する。そのため、文脈において他の動作を共に行うことが想定されている場合は、「～するのに間にあう」という意味を表すことができる。

17, 上下無常非爲邪也, 進退無恆非離羣也。君子進德脩業, 欲及時也。《易經》乾) (上がったたり下がったりして一定しないのは、邪悪な行為をしようというのではない。進んだり退いたりして定まっていないのは仲間を離れようというのではない。君子が徳を深めて行いを修めるのは、〔時機を逸しないように〕必要な時に間にあうようにしたいためだ)

したがって、こうした条件のもとで“及”が否定形で使用された場合、「～するのに間にあわない」を示すことになる。その意味が明瞭に現れる例として、

否定詞に“未”が使われたものを以下に見る。

- 18、生十年而喪先君，未及習師保之教訓而應受多福。《春秋左氏傳》襄公十三年）（生まれて十年で父を失い、まだ守り役の教を学ぶのが間にあわないうちに君主の地位を受けることになった）
- 19、客有教燕王爲不死之道者，王使人學之。所使學者未及學而客死。王大怒，誅之。《韓非子》〈外儲說左上〉）（客人で燕王に不死の方法を修めることを教えようというものがいたので、王は部下に命じてそれを学ばせた。しかし部下が〔不死の方法を〕学ぶのに間にあわないうちにその客人が死んだ。王は怒ってその部下を罰した）

このように“及”の否定形がその後ろにさらに動詞句を伴うと、しばしば「～するのに間にあわない」を意味する。この意味は否定詞“未”によってもたらされたものではなく、“及”が本来備えている機能に否定詞が伴うことで実現されたものである。そのため、“未及V”でなく“不及V”であっても「～するのに間にあわない」を示すことができる。

- 20、兄弟皆在他邦，加一等。不及知父母，與兄弟居，加一等。《儀禮》〈喪服〉）（兄弟がいずれも異国にいる場合は〔服喪の儀式的扱いに〕一等を加える。父母の顔を見るのに間にあわないで兄弟と同居している場合も一等を加える。）

こうして“不及V”は「～するのに間にあわない」を示す句型として用いられるが、否定詞に“未”ではなく“不”が用いられるだけに、単なる已然の行為の否定にとどまらない。

- 21、飄風一旦起，則賁育不及救，而外交不及至，禍莫大於此。《韓非子》〈用人〉）（大風がひとたび吹けば、孟賁や夏育でも救うのが間にあわず、外部の同盟国も来ることが間にあわないので、これより大きな災いはない）
- 22、壁壘天旋，神扶電擊，逢之則碎，近之則破。鳥不及飛，獸不得過，軍驚師駭，刮野掃地。《漢書》〈揚雄伝上〉）（壁壘は天のように回らし、〔士卒は〕鬼神の如く咎ち、稲妻の如く撃つので、逢えば碎かれ、近づけば破られる。鳥は飛び去るのに間にあわず、獣はその場から逃げることができず、軍隊が一斉に動くと、すべてが殺されて原野は根こそぎ掃蕩され尽くす）

これらの例では、いずれも“及”が否定詞を伴い、「時間的に間にあわないので～できない」という意味を示している。これはとりもなおさず可能表現に接

近したものに他ならない。とりわけ例文 22 では、対句が採用されており、“鳥不及飛”が“獸不得過”と対を構成しているから、“鳥不及飛”が可能相当を示す用法として書き手によって意識されていたことは明らかである。

こうして“不及V”は、原義として可能を示す語を内包しないにもかかわらず、「時間型」可能表現のための句型として機能する。可能補語の未発達は言うまでもなく、文言由来の能願動詞系の語を除けば、“得”による可能表現すらまだ萌芽の水準にしか成長していなかった上古漢語において⁵⁾、“不及V”が持つこの機能は、重宝されるものであったろう。

3.1 中古漢語および近世漢語における“不及V”の普及

上古漢語の“不及V”は中古漢語に受け継がれる。

23, 漢時, 會稽句章人, 至東野還, 暮不及至家, 見路旁小屋燃火, 因投宿止。《搜神後記》6) (漢の時代に会稽句章の人が東野に行き帰ろうとしたところ、日が暮れて家に戻るのに間にあわず、道ばたに家が火を灯しているのが見えたので、そこで宿を取った)

24, 庾每詣周, 庾從南門入, 周從後門出。庾嘗一往奄至, 周不及去, 相對終日。《世說新語》33 〈尤悔〉) (庾が周を訪れるたびに庾が南門から入ると周は裏門から出た。ある時、庾がいきなり周の家に行ったので、周は出て行くのに間にあわず、庾と一日中、向かい合った)

25, 方熲竈衮⁶⁾, 忽爲火迸, 驚忙之中, 不覺蕪帶, 倉惶不及更服。《朝野僉載》6) (ただ今お召し物に縵を当てていたところ火が飛んでしまい、慌てふためいているうちに帯が焼けてしまったので、慌てて服を着替えるのに間にあいませんでした)

26, 覺桃香異常, 訪其僧。僧不及隱, 言近有人施二桃。《酉陽雜俎》〈玉格〉) ([史論という人物はある寺院で]桃の香りがとりわけすばらしいのに気づき、僧を訪ねた。僧は桃を隠すのに間にあわず、近所の人が二個の桃を布施してくれたと〔嘘を〕言った) -

27, 布施有多功德, 一一不及廣讚。《敦煌變文〈醜女緣起〉》(布施には多くの功德があるので、一つ一つ広め讃えるのに間にあいません)

これらの例の用法を観察すると、いずれも「時間的に間にあわないので～することができない」という意味の「時間型」で使用されていることが知られる。これは上古漢語に既に見られた用法がそのまま継承されたものである。また、動詞を賓語として従える例で可能の意味を内包する用法は、すべて否定形“不

及V”での使用に限られる。この点も、上古漢語が持つ特性を受け継いだものである。

かくて“不及V”は事実上の時間表現に関する可能表現否定形句型として定型化に向かい、さらに近世漢語へと引き継がれる。

28、執事者不及囑諭小心，聰已率衆至門。《董解元西廂記》2）（執事が注意するように言いつけるのも間にあわず、法聰は已に衆を率いて門のところまで来た）

29、若說道偶忙不及寫畫，切望情怨，這却無害。蓋自家有忙底時節。《朱子語類》18）（もし偶々忙しくて書くのが間にあわないために許してほしいと言うのであれば、これは差し支えない。自分には忙しい時があるものだから）

30、某外日荷蒙持盃之款，深切仰思，未嘗少替。某偶以薄幹，不及親詣。（清平山堂話本〈簡貼和尚〉）（私はかつてあなた様と盃を共にする幸いを得て、深く思慕し奉り、未だ忘れることがございません。私は偶々些か用事があったため、自ら伺うのに間にあいませんでした）

31、恨無磨勒盜紅綃之方，每起韓壽偷香竊玉之意，今晚既蒙光臨，小生不及遠接，怨罪，怨罪。（清平山堂話本〈風月瑞仙亭〉）（紅綃との恋を助けた磨勒のような侠客がいないことを残念に思い、韓壽が美女に気に入られて香を送られたことを思っただけで済ませたいところ、今晚はこうしてあなた様においでを願うことができましたが、私ははるばるお迎えに上がるのに間にあわず、まことに失礼致しました）

こうして“不及V”はその勢力を順調に伸ばしているかのようであった。

3.2 中古漢語における“V不及”の成立と近世漢語における“不及V”“V不及”の対立

しかし中古漢語期には、“不及V”に関連して別の動きが発生していた。すなわち“V不及”の台頭である。

よく知られているように、中古漢語期は補語構造が普及し始めた時期に相当する。この時期は、上古漢語における動詞連語（V+V）の内部構造が変質し、結果補語構造（V C）が生み出され、さらに可能補語構造（V得C/V不C）の萌芽形が成立した時代であった⁷⁾。そのため、そうした変遷史の潮流の中で、“及”を伴う句型も結果補語構造や可能補語構造の構築に向けて変質を始めていた。すなわち上古漢語の“V+及”（第2.1章）が原型となって結果補語構造と

しての“V及”が形成され、さらに可能補語構造に接近した句型が作り出された。

結果補語構造に向けて変質を始めた“V及”の姿を示すものとして、“論及文章”（文章を論じる）（二十卷本《搜神記》18）、“戮及妻孥”（妻子までが刑せられる）（《冥祥記》）、“知及文章”（文章のことをわかまえる）（《世説新語》〈品藻〉）、“寵及老臣”（老臣を寵愛する）（《洛陽伽藍記》〈城東〉）などを挙げることができる。但しこれらは上古漢語の“V+及”が持つ機能をそのまま継承しているため、「空間型」機能しか備えていない。ところがこうした環境のもとで、「時間型」の機能を持った“V不及”が姿を現し、「時間的に間にあわないので～できない」という意味で用いられるようになる⁶⁾。

32、僧死後、闔宅常聞經聲不絕。張尋知其冤，慙悔不及。《酉陽雜俎》續集〈寺塔記上〉（僧が死んだ後、家中でいつもお経の音がずっと聞こえた。そこで張はその僧が無実だったことを知り、心に恥じて後悔しても間にあわなかった）

33、皇帝與高力士見一條紫氣昇空而去，皇帝追悔不及。《敦煌變文〈葉浄能詩〉》（皇帝と高力士はひとすじの紫の煙が空に上がるのを見て、皇帝は〔浄能が天に去ったことを知ったので〕後悔しても間にあわなかった）

34、供軍每日用甘萬貫錢，諸道般載不及，遂從京城內庫般糧不絕。《入唐求法巡礼行記》会昌三年九月十三日（軍に一日に二十万貫の費用を使ったので、諸州が軍用金を運び届けても間にあわず、京城の倉庫から糧食を絶えず送った）

可能補語構造“V得C/V不C”は結果補語構造“V C”と密接な関係を持ちつつ発生したと考えられるので⁹⁾、“V不及”の場合も“V及”の機能と形態との関連のもとで成立したと想定できる。ところが“V+及”や“V及”が「空間型」の機能しか持たない（第2.1章、本章）にもかかわらず、ここに挙げた例の“V不及”は「時間型」であり、「空間型」機能を有しない。そのため、機能の点でこれらの“V不及”は“V及”と歴史的継承性を持たず、したがって“V不及”は“V及”の単なる延長線上に発生したものと推測するのは不合理である。

一方、“不及V”は形態的には可能を示す構造でないが、“及”が否定詞と結びついた際に生じる機能によって、「時間的に間にあわないので～できない」という意味を持ちうる（第2.2章）。この「時間型」機能において“不及V”は上例の“V不及”と機能が重なる。そのため、機能に基づいてみた場合、可能補語構造の形態を備えた「時間型」“V不及”は上古漢語の動詞連語“不及V”と継

承性を有することになる。しかも“V不及”と“不及V”は同一の機能を持つだけでなく、外見上も類似した形態を備えている。そのため、両者は混同されがちな条件を備えていると言える。事実、中古漢語期から近世漢語期にかけて、両者は共存し、同時代の同一作品においてすら混用される。

35, 半萬賊兵勝到來。寺僧不及措手, 惟掩戸以拒軍。《董解元西廂記》2)
(五千の賊兵がどっとやって来た。僧達は対処するのも間にあわず、ただ入り口を閉じて防ぐばかりであった)

36, 打脊的髡徒恁恁麼。措手不及早擲過我。《董解元西廂記》2)(憎き禿げ坊主はどうしてこんなに遣り手なのだ。我々が対処するのも間にあわず、早くも擦り抜けたぞ)

例文 35 が“不及V”の例であり、例文 36 が“V不及”の例である。かつて上古から中古にかけて“無所措手足”(《論語》〈子路〉)や“無所措手”(《魏書》〈孝靜紀〉)、“不敢措手”(韓愈〈進撰平淮西碑文表〉)などの表現があり、おそらくこれらとの関連のもとで、“不及V”の句型に基づき“不及措手”が生み出されたものであろう。“不及措手”という形態が誕生した後は、可能補語構造“V不C”が盛行する環境において、類推の圧力のもとで“V不及”型の“措手不及”が成立し⁽¹⁰⁾、その結果“不及措手”と“措手不及”とが同時に使用されることになる。上記《董解元西廂記》の例は、こうした状況を反映したものと見ることができる。

かくて“不及V”と“V不及”の混用は長期にわたって続き、明代末期に至ってもその様子を確認できる。

37, 他正要去拜杜子中, 就急忙起身來到杜子中家裏, 不及說別樣說話, 忙問聞俊卿所言之事。《二刻拍案驚奇》17)(彼はちょうど杜子中を訪問しようとして、急いで出かけて杜子中の家に来たところ、別の話をする間もなく、慌てて聞俊卿の話したことを聞いた)

38, 其中有許多委曲, 一時說不及, 父親日后自明。《二刻拍案驚奇》17)
(そこにはいろいろわけがありますので、すぐに言うのに間にあいませんが、お父様はそのうちおわかりになります)

ところが、同一機能を持ったこの二つの句型は、混用の過程で対立し、両者の間で使い分けと淘汰が始まる。その結果、白話文体ではしだいに“不及V”が衰退し、可能補語型“V不及”が主流になっていく。近世白話において可能補語の盛行する潮流が既に確立されていたからには、“V不及”が勝利を収めるのは歴史の必然であったろう。

今、試みに、“不及V”と“V不及”の用法について、時代別に計数してみると以下の数字を得ることができる。“不及V”から“V不及”への移行の傾向を、ここに明瞭に認めることができよう⁽¹¹⁾。

(表1) 「～するの間にあわない」を示す句型の時代別分布

	“不及V” (上古漢語由来)	“V不及” (中古漢語由来)
《世説新語》(六朝)	2例	0例
《董解元西廂記》(金)	3例	2例
《初刻拍案驚奇》(明末)	9例	15例

このように、“不及V”の使用比率が減少するにつれ、“V不及”の使用比率が増加している。しかも両者は機能が同じであり、形態の点でも互いに共通性を具えているので、両者は変遷史上、互いに密接な関係を持っていると認められる。すなわち、系統発生的には“不及V”は“V不及”の原型であり、上古漢語に由来を持つ“不及V”は、可能補語構造に姿を変え、近代的な“V不及”の形態を身につけることでその系譜を近世漢語期にまで繋げたと見ることができる。

4 おわりに

“不及V”は「時間型」可能表現の原初の形態という点において、“来得及／来不及”の成立史上、極めて大きな意味を持つ。小論はその観点に基づき、“不及V”の誕生と発展の姿を追跡し、あわせてそれと“V不及”との関連について考察を加えた。それらの変遷過程をまとめれば、以下のように述べることができる。

上古漢語において動詞“及”は単用されたり連語構造を構成したりして、多様な使い方がなされた。しかしそれらを機能に基づいて分類すると、「時間型」と「空間型」の二種類に分けることができた。それを句型ごとに整理して見た場合、機能と形態の両面で“来得及／来不及”と関連が深いのは“不及V”であり、また形態の点でのみ関連があるのは“V及”であることが知られた。

そこで小論はそれらのうち“不及V”を主な対象として、上古漢語期から近世漢語期にかけての変遷過程を追跡した。上古漢語において“不及V”は、動詞“及”が動詞句を賓語として従えた際の単なる否定形でしかなかったが、その機能は「時間型」に偏って使用された。この機能は「時間的に～するの間にあわない」という意味に基づいて発生したものだけに、「間にあわないので～できない」という可能に相当する意味を内包することができた。その結果、この句型は重宝され、六朝以降の口語系文体において定型化し、時間意識に基づく可能相当表現を示す否定形句型として定着した。

しかし中古漢語期において結果補語構造や可能補語構造が誕生し、それが盛行する環境が整うと、他の動詞連語に対するのと同様に、結果補語構造“V C”との関連のもとで可能補語構造“V得C/V不C”を形成しようとする力が働いた。その結果、上古漢語由来の“V及”の一定の影響力のもとで“V不及”が成立した。しかし小論で指摘した“V不及”は「時間的に～するのに間にあわない」という「時間型」機能を備えるものであり、一方、“V及”は「～まで至る」という「空間型」機能しか備えていない。そのため、機能に基づいて見た場合、この“V不及”は形態的には可能補語構造であるにもかかわらず、対応する結果補語構造“V及”との間に歴史的継承性を有しない。

やがて中古漢語期から近世漢語期に至る頃になると、上古漢語に由来する“不及V”と、可能補語構造に接近する過程で中古漢語期によく発生した“V不及”とが共に使用され、両者は同一の機能を備えていたため互いに競合するようになった。この二つの句型は長期間にわたって争ったが、明末頃までには、伝統的な“不及V”は新興の“V不及”に圧倒された。この結果、「時間的に間にあわないので～できない」を示す表現としては“V不及”句型が明代白話において優勢を示し、現代漢語の“来不及”の原型が成立する環境が整った。

現代漢語の“来不及”はこうした背景の下で成立した。したがって、「時間型」機能に基づいて見た場合、“来不及”の所謂原型は“来及”ではなく、“不及来”という形態を想定すべきである。現代漢語において“来不及”と“来及”が機能上の対応関係を持たない理由の一つは、以上の成立過程に求めることができる。

なお、動詞連語“不及V”と可能補語構造否定形“V不及”との間で発生した混同と類推作用、またそれらから可能補語構造肯定形“V得及”が生み出される過程については、紙幅の関係で別稿に譲られる⁽¹²⁾。

注

- (1) “不及来”そのものが古くから多用されたわけでないが、“不及V”句型の歴史は古い。
- (2) 拙論 2007 では、“V不及”句型には機能の異なる二種類が存在するという観点から、“来得及/来不及”の成立過程を考察した。小論は、その二種類の“V不及”のうち、「時間型」「V不及」の起源に関わる一要素について述べるものである。
- (3) この文の解釈については、孔穎達の疏に基づき抽象的な程度を伴う行為を示すものとしてしばしば説明される。また“跛”を“企”に作るテキストもあるため、“跛”を「くわだてる」と訓じて文全体を比喻として理解しようとする立場もある。

しかし段玉裁に拠れば、この“企”は“登”という意味であるとされるので、引用部分は本来、具体的な高さを表現したものであると理解するのが合理的である。小論は訓詁を目的とするものではないので、語義に基づき直訳した。ちなみに《新釈漢文体系》は「意識に流れ」ることを避け、背の高さを表すものであるという理解を『語釈』において示している。

- (4) 結果補語構造の成立過程とその時代については蔣紹愚 1999 に詳しい。またここで挙げた“V及”が結果補語構造に進化する過程については拙論 2007 で既に触れた。
- (5) 太田 1958、p229 には上古漢語の“得”についての指摘がある。
- (6) 《朝野僉載》は宝顔堂秘笈所収本に拠った。但し該本は引用部分冒頭を「方慰竜衰」に作る。引用にあたっては、《太平広記》300 所引に基づき「方熨竜衰」に改めた。なお、小論は、《書経》《易经》《春秋左氏伝》《周礼》《礼記》《儀礼》《論語》《莊子》《荀子》《韓非子》《世説新語》《洛陽伽藍記》は四部叢刊所収本、《漢書》《魏書》は百衲本、《搜神記》《搜神後記》《酉陽雜俎》は学津討原所収本、《冥祥記》は《魯迅全集》所収《古小説鈎沈》、《入唐求法巡礼行記》は群書類従所収本、敦煌變文は《敦煌變文集新書》、韓愈文は《韓愈全集校注》、《太平広記》は談刻本、《董解元西廂記》は嘉靖本、《朱子語類》は明刊日中合璧本、清平山堂話本は内閣文庫蔵本、《二刻拍案驚奇》は尚友堂刊本をそれぞれ使用した。
- (7) 楊建國 1959、潘允中 1980、岳俊発 1984 などでは、結果補語構造と可能補語構造の成立過程が検討されている。
- (8) 結果補語構造に接近した“V及”及びそれに関連した可能補語構造の用例と語法的特徴については、拙論 2007 で既に触れたことがある。
- (9) 注 7 に同じ。
- (10) “V不及”型可能補語の発展については、拙論 2007 及び 2008 で述べた。
- (11) “V不及”には、補語構造形成の際の過渡期的形態が存在するため、その扱いによっては表の数字は些か異なる。
- (12) 拙論 2008。

参考文献

- 伊原大策 2007 可能補語「来不及」の起源に関わる二つの「V不及」、《集刊東洋学》98
- 伊原大策 2008 “来不及”型可能補語句型の成立過程、《筑波大学地域研究》29
- 太田辰夫 1958 《中国語歴史文法》、江南書院
- 岳俊発 1984 “得”字句的産生和演變、《語言研究》1984-2

- 蔣紹愚 1999 漢語動結式產生的時代、《國學研究》6
潘允中 1980 漢語動補結構的發展、《中國語文》1980-1
楊建國 1959 補語式發展試探、《語法論集》3、中華書局

(筑波大学)